　　　　　通信第三十六号　「願いに生きる」

　日本では新型コロナウイルスが落ち着き日常生活を取り戻しつつあります。しかし、世界でも日本でも今までにない生活が始まろうとしています。これからの倒産や失業者の増大、社会生活の不安定化や治安の問題などが心配されています。極度に心配したり、また楽観視することもできませんが、私たちは新しい課題を突き付けられています。

　疑問を感じつつ、これからも便利さを追求する科学技術は止まることはないでしょう。世界の科学者を代表するアインシュタインは「科学なき宗教は盲目であり、宗教なき科学は本当の幸福をもたらさない」と言われたのは大切な呼びかけであります。科学のみならず政治も教育も経済も医療も同じでありましょう。信頼のおけないニュースや根拠のないにふりまわされ、後になって落胆することも少なくありません。

　自然破壊も大きな問題となってきました。人類は長年にわたって当たり前のように自然を征服し、農地や町や道路をつくり人口を増やして来ました。それにともない多くのいのちを絶滅させてきました。最近になってこれまであたり前としていた空気、水、温度、海などが汚染されて自然体系が崩れています。そういう中で、今までにないウイルスなども次々と登場してきました。よく自然を守ると聞きますが、その中にも人間のおごりがないでしょうか。そもそも私たちは無数のはかりしれない自然にまもられて来たのです。そして今も、これからもです。

お釈迦様の亡くなられた時の様子が「涅槃図」にあらわされています。そこには人間だけでなく、動物や植物など生きとし生けるものの悲しんでいる様子がえがかれています。これは「本来いのちは一つ」というおりを現わしていると私は頂いています。人間だけの幸福を追求しても本当に幸福にはなれないということです。東洋は自然と一体の文化の歴史があります。それが家の作りや庭などの生活や文化に一貫して現れています。さらに宗教の底流にながれています。たとえば各村に寺や神社があり、家庭に仏壇が当たり前のごとくにありました。外国の方が日本に来て「日本には各家庭に教会がある」と驚いたのです。外国では教会にしか礼拝の場所はありません。信仰の世界でも、東洋は仏凡（凡夫）一体とか、理知によって二つに分かれる前の世界がさとりの世界となっています。西洋は神と人間の世界があり、神のしもべという二つの世界です。神の名のもとに戦争があります。神に近い人間が中心にあり、自然に打ち勝ち、征服して勝ち取っていくという文化がありました。明治時代、そして敗戦から西洋の文化が日本に次々と流れ込んで考え方や文化が変わって来ました。ところが最近では外国の方々が日本の文化にかれ、来日されています。外国の人に日本文化のすばらしさを教えて頂くこともよくあることです。キリスト教に疑問をもたれて仏教の勉強をしておられる方も珍しくありません。また逆に形式化した仏教に魅力を感じられずキリスト教や新興宗教に入信する方々も多くおられます。

　日本人の祖霊信仰に仏教が融合した経緯があるために、多くの仏教徒が先祖供養や亡き人の供養ということで止まり、それ以上の深い信心の世界に進むことができていません。よく先祖を守る、そのために仏壇を守るという考えの人も多いのですが、すでに先祖に護られ、諸仏に守護されているのです。だからお礼せずには落ち着かないのです。られているから護る、護るから諸仏に守護されるという明るい循環のなかで幸福感がおのずと生じます。報恩感謝の生活がおのずから現れてくるのです。信心のご利益の諸仏護念の利益、諸仏称讃のご利益などの現れです。これとは逆に、守護されていることを知らないから手を合わせない、したがって守護されない。まわりがのように感じられて悪循環のありかたとなっていきます。これがその人だけにとどまらず家族や地域、さらに国までつながっているような気がします。一体とか調和をわすれた人間のおごりが増大しているようでなりません。

　さて、こういう時代社会の中でいかに生活してゆくことが本当の幸福につながるのでしょうか。多くの人が出口を求めています。こういうときにこそあらためて浄土真宗の尊い教えを深く聞いてまいりましょう。

ここで、通信によせられた求道者のお便りをご本人の了解のもとに紹介させて頂きます。掲載の時は必ず了解をとらせて頂いています。

　　「通信三十三号の十ページ、人間からは真実のお礼や満足はありません。自分にとって都合が良いか悪いかしかありません。浄土がなければ穢土もありません。ただ我欲にまみれて、損した、得した。勝った負けた。良かった悪かったと人間のはからいと目に見える物質的価値の世界を堂々巡りするしかありません」

　これを読んでほんまやな、僕のことをいわれているなと思いました。ほんとうだと思えると、いい事でもないのに嬉しく感じました。

　　三十四号の三ページ「南無阿弥陀仏は形の無い光が、善し悪しの言葉で苦しむ人間に言葉と

なって下さった光明であり、言葉の仏さまであります」

　ここで、形の無い光とあります。『正信偈』にも親鸞さまはたくさん光、光。南無不可思議光

と書いておらますが、よくわかりません。仏さまは、光であるということが、しっくりはっき

り感じられなく、わからなく、もどかしいのです。太陽の光や電球の光はわかります。仏さま

の光はわからないなあ。

言葉の仏さまとあります。言葉を日常わたしたちは意見やコミニケーションの手段として使っ

ています。第十七願の言葉の仏になるという願から出た言葉は、今、私たちが使っている言葉とちがいがあると先生は書いていらっしゃいました。どうも、僕には、言葉はどのようにして出来たか？南無阿弥陀仏の言葉と、僕が使っている言葉はそんなに大峯先生が言われているほどなんでちがうのか？はっきりわからないのです。

なまんだぶつ　なまんだぶつ

　僕は五十四才の在家の普通の家庭人です。仕事は、ヤマト運輸の集荷、配達を平成五年からし

ています。仏教の聴聞は平成十七年からしています。阿弥陀さまの救い、親鸞さまの教えが好き

です。子供は出来ませんでした。妻と両親と同居です。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　岡山県総社市　難波政彦

　難波さんとはまだ直接にお会いしたことはありません。長仁寺のホームページからのご縁の同

行さんです。通信にしても、本を出させて頂いても、ユーチューブにしましてもこういう求道の

人のご縁になればと願っています。出させて頂いた甲斐があったとうれしいです。在家の求道者

として飾り気のない尊いご質問です。共にご本願に救われていきたい願いです。

　親鸞様ののお言葉を頂きましょう。親鸞さまが八十五歳の時にご制作された「一念多念文意」

の中に在るお言葉です。難波さん五十四歳、私六十四才の私たちが深く味わえるはずはないこと

を前提として聞いて見ましょう。

　　　宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海の水のへだてなきにたとえたまえるなり。この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となのりたまいて、無碍のちかいをおこしたまうをたねとして、阿弥陀と、なりたまうがゆえに、ともうすなり。これを尽十方無碍光仏となづけたてまつれるなり。この如来を、南無不可思議光とももうすなり。～～～この如来は、光明なり。光明は智慧なり。智慧は光りのかたちなり。智慧またかたちなければ、不可思議光仏ともうすなり。

　「智慧またかたちなければ」とは形無き光に智慧という言葉をあてたということではないでし

ょうか。ですから智慧はかたちがないのです。人間の理知の説明でわかる世界ではないのです。

人間の思議を超えた光ですから。でも光が自覚されないと無いに等しいのです。そこであらゆる

方便（形をとる）をとって目覚ましめようと、如来さまが法蔵菩薩と成られて私の中でご思案さ

れ、修行を積まれているのです。ゆえに難波さんの中の法蔵菩薩さまが問いを起こされたのでは

ないでしょうか。

　恩師の大石先生は「太陽の光は本来無色透明であり、地球のオゾン層にあたって光を発し、物

体に当たって色をだしている」というお譬えで教えてくださいました。

　また、先生の「光あり」という作詞の歌で

　　　十方衆生と呼びたもう

　　　　法蔵菩薩は**光**りと**いのち**

　　　　願をこめてがために

　　　　南無阿弥陀仏とれたもう

形無き無辺の光といのちが法蔵菩薩という形となり願を建てられ、形にわれ縛られて苦悩する衆生をいかに救うかということでご思案され、ご修行されて南無阿弥陀仏と私の中に生れて下さったのです。このご恩をつねにお味わいになられていた親鸞様がおおせられていたこととして

聖人のつねのおおせには「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　「歎異抄」後序

無限の闇を照らし破る力があるのは本願の光のみです。私は自分の努力や能力を鍛えて自分

が明るくなれる。安心が出来る。寺も明るくなれるとかたくなに信じていました。もともと能力、体力、気力が弱いのに、がむしゃらにやっては空回りするばかりでした。大石先生に遇わなかったらその思い込からただもがくのみで老いて、病気をして、死んでいったにちがいありません。だから私において善き師、大石先生は光りの人なのです。

言葉は同じ言葉であってもどこから出ているのか。人によって出どころのちがいがあります。

光明土から出た言葉は人間を救うために出ているので光明土へ生まれられるのです。浄土に往生された得道の人の言葉には慈悲と智慧が入っているので明るくなれるのです。人をあざむき、傷つけ攻撃する言葉に人を救う力はありません。たくさんの攻撃する言葉によって自殺する事件も出ています。甘い言葉やたくみな説明によってに会う人もいます。言葉は出どころにより、また受け取りかたよって人間を救う光ともなり、闇に落ちる道具ともなります。

私の青年、壮年時代は真っ暗だったと実感しています。それでも結婚が出来、子供にも恵まれました。大坂で二年、京都で九年勤めました。その間一貫して、月に最低二回は聞法会に出ました。それでなんとか勤めが出来ました。感じやすいタイプの人間なので疲れやすく、世渡りもへたでした。さらに仕事場にパソコンなどが入って来てついていけずに悩みました。そういう中で聞法会へ出て、教えを聞き、皆さんと座談することで、傷ついた心がいやされ、また働こうという意欲をいただいていました。

最初の師である藤谷秀道先生に「今君のモヤモヤしているのは法蔵菩薩さまのご思惟であり、

心が苦しいのは法蔵菩薩様ののご修行だよ、今解らなくても、わかるときがくるよ」と言われた時、訳の分からない混乱した言葉の世界ではなくて、ヘレンケラーが水に触れたような何か異質な世界に触れ、生きてゆく光の方向を与えられた感じでした。

　　智慧の念仏うることは

　　　法蔵願力のなせるなり

　　　信心の智慧なかりせば

　　　いかでか涅槃をさとらまし

今でも心は常に妄念妄想が沸いて来ます。しかし、お念仏のおはたらきで妄念妄想がいつのま

にか消されています。持ち越し苦労の執着心、まだ来ぬ先の取り越し苦労の執着心も我執が正体であると知らされればいつまでも引きずることはなくなりました。感じやすい性質の自分を受け入れていけます。有難いです。

また、私は小さい頃から不眠症でモヤモヤが沸いてくる夜が怖くてたまりませんでした。夜急

に鳴く鳥のおそろしい声にもおびえました。正体はの鳴き声だったのです。夜が明けて見ると雲や霧がいっぱい見えてきますが暗く成りません。夜だったからおびえていたのです。智慧の念仏のお蔭で心が明るくなりました。不安いっぱいのこころがずいぶん落ち着かされ幸福を感ずるようになったのです。「暗く固かった顔が柔らかく明るくなったね」とよくいわれます。私には光の救いのあかしのように思えるのです。浅ましい心や妄念妄想は次々と起こって来ます。煩悩は前と少しも変わりませんが、それなりに落ち着いておれるのです。不思議です。

宝海の海ということについても、師の教えが生きています。「すべての川は海に向かっている、川のときは名前があり、大きいとか小さいとか、濁っているとかんでいるとか比べあっているが海に入れば川の名前が消えて、海の一味とひとつになる。海の方に川の水を引き寄せる力がある」と。広大なる海の功徳、人間の思議を消して下さる功徳を教えて下さいました。理屈で考えているときは川の状態です。川も大きくなり、さらに、海と一味一体と成らされた時、本当の安心がもたらされるのでありましょう。

親鸞さまも海という語で私たちの迷いの広大さと救いの広大さを伝えて下さっています。

いま弥勒付属の一念はすなわちこれ一声なり、一声すなわちこれ一念なり、一念すなわち　これ一行なり、一行すなわちこれ正行なり、正行すなわちこれ正業なり、正業すなわちこれ正念なり、正念すなわちこれ念仏なり、すなわちこれ南無阿弥陀仏なり。

　　しかれば、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに（衆生のわざわい）のず。すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳にうなり。知るべし、と。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　真宗聖典一九二頁

親鸞様の歩まれた道であります。また、師がその道を歩まれ、育てて下さったお蔭で、悪業

の海の中で小舟が転覆して死んでしまうしかなかった私がお念仏一つで大悲の願船に乗せて頂き、海がいつのまにか光明の海となりが転じられて、穏やかに落ち着いた日暮をさせて頂いている実感であります。もちろん日々、大波、小波はあります。しかし、不思議に転じられていきます。すべてご本願（光）のお蔭、師のおかげ、親鸞さまのお蔭であります。

つぎに日立市の川崎弘光さんがご縁をつけて下さった同行さんからのお便りです。

　拝復

　　　過日は、川崎弘光さんの御縁で通信三十一号～三十三号を御恵贈いただきありがとうございました。中津には、信国淳先生のお墓まいりに行ったとき、一度駅に立ったことがあり、懐かしい気持ちになりました。

　駅前の喫茶店に「人知るもよし　知らぬもよし　我は咲くなり」という武者小路実篤の詩画が

飾られていて、先生がよくそれを眺めていたと聞いたからです。機会があったら、一度長仁寺様

にもお参りしたいと思っております。

　通信を拝読して「」という言葉があることを知りました。強盗の被害に遭いましたが、

強盗は私自身であったと教えていただきました。ありがとうございました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

土浦市　川島　弘之

「」の問題が課題になる人はよほどの宿善がある方だと思われます。藤谷先生は「盗法罪」を「」と言われました。清沢満之先生は「如来の仕事を盗んでいる間は、いかにしても苦悶を脱することはできない」と述べておられます。イモムシがさなぎとなり蝶と飛躍していくように、信心の道も何度も苦しみと脱皮があります。

　親鸞さまは教えを聞く中に無意識の自我が含まれている在り方を二十願の問題として生涯ごまかすことなく歩まれたのではないでしょうか。一度ひるがえっても死の一息までと報謝の念仏は絶えることなく生長し続けたのであります。親鸞さまは二十九歳の時、法然上人に出遇われ「雑行を捨てて本願に帰す」と方向転換をされました。ところが、同じ念仏を申す法然上人の兄弟弟子の方々に疑問をもたれました。そこに出て来たのが信心の課題です。若き親鸞さまは三百八十人以上の同輩の方々に、法然上人のお許しを得て「念仏で助かるのか、信心で助かるのか」と問いかけられました。念仏さえしておれば助かる、というような安易な在り方に疑問をもたれたからでありましょう。門徒の勤行本は「正信偈」です。「念仏偈」とされなかったゆえんも蓮如上人のご配慮だったのではないでしょうか。親鸞さまも蓮如さまも信心の純潔性に妥協されなかったのです。浄土に生れるについて「信心正因、称名報恩」といわれます。逆ではありません。「称名正因、信心報恩」のほうが人間の情としては解りやすいのではないでしょうか。

　蓮如上人の御文様には「弥陀をたのむ（帰命）一念とご恩報謝の念仏」とが対句のように出てまいります。弥陀のお蔭、法蔵菩薩様のお陰で「弥陀たのむ一念」が発起されたのですから自分の力ではありません。阿弥陀様が主体ですからお返しさせて頂く、ご恩報謝です。御返しが無いと自分にとりますから自力の念仏となったり、自分がした苦労となったり、自分の勉強の結果として信心が明らかになったと自分の手柄にしてしまいます。法を盗むことになるのです。大石先生が「念仏はお礼です」とおおせられたのは重大なことであったのです。「ご恩報謝の念仏」は法執、盗法罪の自覚であり、超えていく鍵でもあったのです。

親鸞様は四十一歳の時、目の前の飢饉をまのあたりにされて、三部経千部読誦を発願されました。ところがすぐに中止されて、お念仏に帰られました。さらに、五十九歳の時、発熱されて、病床で『大無量寿経』の文字が金色となって浮かんだことを縁として、十八年前の三部経千部読誦を思いだし、自力の執心（盗法罪、法執）の根深さを妻の恵信尼さまに告げられています。信心も卒業したら止まってしまいます。初一念であり信心は常に前進であります。新鮮に生長していくのであります。

しかし、生長は人間の能力や努力で出来る事ではありません。真宗では仏弟子になる証として帰敬式を受けますが、その時に仏弟子の名乗りとして戒名でなく法名をいただきます。戒律を守っていくことではないからです。

『浄土論註』というお聖教の終わりの文に

　　たとえば人あって、（地獄、餓鬼、畜生）の苦しみをまぬがれるために、戒を守ろうとし、戒を守ることによって落ち着き、落ち着くことによって、ほかの人にできない力を身につける。そしてありとあらゆる世界に遊行することができるようになる、というようなことを自力となづけるのである。

また、劣ったもの、身分の低いもの、弱者でも、転輪聖王（諸仏・善知識様）の行列に従っていきさえすれば、たちまち虚空にかけのぼり、あらゆる世界に思いのままに遊行して、少しも障害となるところがない、というようなのを他力と名づけるのである。

私は前者のほうに頷き、成り上がろうと必死に努力していたのです。いや、今でも無意識にそうなります。自力の執心の根深さです。盗法罪です。我の方には智慧も慈悲もないくせに我が力をたのみとするのです。

さらに、「論註」には

　　愚かではあるが、浄土のを学ばんとする後につづく者たちよ、他力に身をまかせるべきむねをよく聞いて、信心をおこすべきである。けっして自分だけの小さなおもいにひっこんでひとりよがりにならないように。

と、に呼びかけておられます。千三百年の年月を超えて曇鸞様にはたらくご本願が呼びかけて下さっています。

だからこそ腰を下ろさずに進んで行かされます。「如来を信じ、たのむ者は、けっして空しい人生にはさせないぞ、座りこませないよ」という仏様の本願力でありましょう。

『大無量寿経』の本願成就文には五逆誹謗正法の文が消えていません。盗法罪の問題です。私は十八願が成就したら消えると思っていましたがそうではありませんでした。いよいよ深く五逆誹謗正法の自身のすがたが照らされては懺悔と報謝の一道に歩まされるのであります。肉体の死ぬ一息まで煩悩は絶えることはありません。しかし、煩悩を断ぜずして涅槃を得る道であります。炭があるから火が燃えるごとく、炭が火に転じられていくのであります。次元の転換であります。我が能力では絶対に歩めない道であります。盗法罪は一生の大切な課題であります。卒業せずに一生現役の求道者として深まり続けて頂ける原動力であります。

　新型コロナの中、同行のみなさまとしばらくお会いすることができません。ひとり一人与えられた環境の中で、如来さまからの一日一日を、如来様さまに使って頂いて、願いに生きる生活をさせて頂きましょう。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照

令和二年六月

ユーチューブの件ですが、私のミスで「長仁寺チャンネル」は一応終了し、「江本常照長仁寺」のアカウントで検索して下さるようお願いします。